

小学校英語教育反対の弁

出来成訓

不覚にも11月末に体調を崩してしまった。町の多くの医院と異なり、筆者の通うクリニックには主治医は週に一度しか来ない。仕方なく安静第一と心得て体力の回復を待ち、主治医の担当日に診察を乞うた。「売薬など使わず安静に努め、気力の回復を図ったのがよかった。自然治癒力が働きましたのですよ」と言いながら、主治医は処方箋をくれた。確かに私たちの身体の中には、病気から回復しようとする自然の能力があるらしい。健康を守るための投薬は、場合によっては避けられないが、薬の使いすぎはこの大切な能力を殺してしまうこともあるという。

私事のつまらぬ話を紹介したのは、医者の方の言う自然治癒力は学生生徒にとっては自発的な勉強や自発的な向上心ではないかと思ったからである。土曜と日曜が連休となっていることが多いようだが、その日を利用して父母と語れ、スポーツや旅行をしろ、などと指図されては敵わない。自然治癒力は減退する一方だ。この国の指導層の人々は「余計なお世話」という名言のあることを忘れたらしい。

小学校・中学校は学習のためと社会人となって

活躍するための基礎教育を与える場である。それ故にここでの教育は義務教育と呼ばれる。ここではまず第一に、しつけ・規律・忍耐などの非個人的な面を教えるべきである。これがないと高学年になってからの演習中心の教育は不可能であり、社会生活に適応するのが困難になる。次に大切なのは、昔の「読み書き算盤」、今風に言えば「国語と算数」である。偏差値の向上や入試問題への適応力の養成を目的とするのではなく、国語と算数を「好きになる」ように指導するのである。日本の中高生の数学の学力は世界でも上位にあるそうだが、理数系を好まない生徒の数は着実に増えているともいう。今後の世界が理数化するのを避けられないだけに、今のままでは将来に不安を感じざるを得ない。「好き」という感情を他の言葉で定義するのは難しいが、「好き」になれば「自発的に行う」という経験則も忘れるべきではないと思われる。

今から30年近く前のこと、言語学を講じていたとき、「言語は、基本的には、人が考えるための基本材料だ」と述べたことがある。そして、日本人にとって日本語は最も大切な言語である。しかも、母語であっても言語の高度な習得は決して楽

ではない。「漫画も読まなくなった学生」「新聞の読めない学生」の存在がこれを証明する。国語教育を大切にすれば、自発的に読書し、自分で考える人も多くなると思われる。

外国語教育はいろいろな意味で大切であろうが、

それは基礎的な義務教育が充分に行われているという前提があつての話である。日本の全小学生平等に（とは強制的に）英語教育を実施するのが本当に有益であろうか。

「句動詞の研究」始末記

橋 本 光 憲

私と句動詞 (Phrasal Verbs) との関わり合いは十数年前に遡る。当時、平塚キャンパスでの教員就任が予定されていた。その準備のつもりで、英語関係の参考書を20冊程読んだ。その中で、「受験英語を活用しよう」といった類の本が2、3冊あった。受験英語のよしあしは別として、大学でこの蓄積を活用しない手はない。受験英語で文法はよく勉強しているし、さらには口語英語にも応用できるとの意見もあった。

その中で、意味の曖昧な make out, turn down などの句動詞を覚えるよりは、意味の明解な understand, reject を使って、充分用が足せるといった意見があった。言い換えれば、字面からは意味の取りにくいアングロ・サクソン系の言葉より、ラテン系の一語対一語対応の言葉を活用してはどうか、ということである。両者の関係は、日本語で言えば「やまと言葉」対「漢字」という関係に置き換えられよう。

事実、英米人に句動詞を多用されると、ノン・ネイティブである我々には、意味が取りにくくなる。私が専門としているビジネス英語は、ネイティブ対ノンネイティブだけでなく、ノンネイティブ

対ノンネイティブの関係を重視している。英語学者には「英語をあるがままに受け止めよう」とする人が多いようで、英語に何らかの使用制限を加えることを嫌うようである。しかし、国際ビジネス・コミュニケーションの場で、ネイティブ側に果して英語を好き勝手に使わせるのが、「正しい」と言い切れるだろうか。

私の句動詞の研究は、句動詞そのもの研究ではなくて、国際ビジネスの中での句動詞のあり方を問うものである。1990年に、ビジネス・コミュニケーション学会 (本部：米国—略称ABC) の専務理事、Dr. John D. Pettit, Jr. が来日して、“... Thus, we should avoid them (ambiguous phrasal verbs and culturally derived words) in our international communication efforts.” と理解を示す発言をし、英語国民側とも問題意識を共有できることを声明したのは意義深い。

その後数年、私は米国での会議や、ニュージーランド (ここでは Rachel McAlpine, Global English for Global Business, Longman, Auckland, 1997 という同主旨の冊子がでていいる)、シンガポール、そしてさる8月には京都でと、発表を続けた。

京都では、句動詞の中で、非英語国民にとって意味の曖昧な27の二語動詞と47の三語動詞を指定し、

更にその代案の英語例を提示した。これで一連の句動詞研究に終止符を打ったのである。

兎も走るキャンパスで —— 国際中世学会参加の記

奥田宏子

イギリスのリーズ大学国際中世研究所が主催する国際中世学会に出席した。ロンドンから北へ列車で2時間半のリーズ市で7月初旬の数日間、世界各国からの中世学研究者と有意義な情報交換の場をもった。分科会数、発表者数、いずれもきわめて多い大規模な学会だった。

分科会がカバーする領域は、学会の性質上、時代としてすべて中世に属し、政治経済は言うに及ばず、宗教、美術、聖書学、教会史、民俗学、聖人研究、アラブ研究、文学および言語、典礼研究、古文書学、修道院研究、科学、神学、などなど、多岐にわたる。このような広い分野を包含する学会には、他にないメリットがある。いわゆる学際的な視点から、狭い専門領域を大きく出て、中世という時代を立体的に捉え、また鳥瞰できる点だ。これは汎ヨーロッパ性が殊のほか強い欧州中世を研究対象とする場合、必然的な視点である。私の専門は中世文学・演劇だが、今回の学会では文学プロパーというよりも、おかげでその周辺領域の研究に触れることができた。

歴史的に一区切りのミレニアム年にふさわしく、今年を中心テーマは、「時間」や「永遠」。従来の固定的な専攻分類や枠組にとらわれることなく、「時」そして「永遠」について、自由に柔軟に探索し意見交換ができた。幾多の専門分野を大きく

カバーする学会ならこそである。

一例として、第一日目の分科会「時と永遠の探求」では、中世における「永遠」観が、哲学者、ビザンチン文化研究者、思想史家、美術史家などによって、まったく異なる角度から分析された。ペーパー発表につづいて、質疑応答、参加者との意見の交換が必ずある。個々の研究者が通常は接触のない分野の専門家と同じテーマのもとに情報交換できる得がたい機会である。

「時」また「時間」は私の関与する中世演劇の研究にとっても重要なテーマだ。2日目の分科会「イギリス演劇における劇的時間」は、実際の上演での「時間の経過」と作品に流れる「時間観念」とを、中世劇を例に丹念に考察した。一方に、演技者の台詞のなかで言及される特定の「時間」があり、他方に、ジャンルとしての中世劇の軸を成す「人類の歴史」をめぐる想念としての「時間」がある。これらの二つの時間はどのように交叉しているか。加えて、人間の創造と最後の審判までを「神の意図」として劇化する中世（宗教）演劇においては、ヨコ軸状の人間時間の中に、人類の救済という「永遠のテーマ」がタテ軸として切り込んでくる。中世劇の「時間」相は複雑である。

7月初旬のリーズは肌寒いと出発前に教えてく

れた人がいたので、秋のコートを一枚持って行った。着いた日の夜、部屋に暖房が入ってホッとすほどの時ならぬ寒さのおかげで何とか対処できた。そして翌朝、薄く朝モヤのかかる緑のキャンパスを、兎が二匹駆け抜けるのを見た。のどかな風景だった。満載のスケジュールをこなして一日

を終え、夕食をとることは、連鎖状に繋がる研究テーマに圧倒されて頭のなかはいっぱいだ。でも、開けてきた水平線の、さらにその向こうにあるものに出会いたい願いで、心はだんだん元気になってくる、そんな有意義なりーズ行きであった。

国際語用論会議参加の記

武内道子

第7回国際語用論学会が、2000年7月9日から14日まで Hungry の Budapest で開催された。今回の特別テーマは、Cognition in Language Use: The role of perception and representation, memory and planning, and metalinguistic awareness であった。いつものように特別テーマに基づく全体会議と研究発表、特別テーマ以外のトピックのポスターセッション、語用論に関係するどのトピックでもよいパネルセッションから成り立っていた。

登録参加者はおよそ950名、当日参加者を加えると優に、1,000名を超えた。全体会議の講演者は第6回 Reims (France) 大会より2件少なく、7名であった。テーマに関する講演は35件あり、パネルディスカッションはこれまででもっとも多く、59件あり、テーマからはずれた研究発表はポスターセッションとしてジャンルごとに130件あまり発表された。

私はパネルディスカッションの一つ “Conceptual contours at the semantic-pragmatic interface” に12人のパネラーと共に発表した。4つのパートに別れて、のべ6時間のパネルであった。会議の成果として、発表論文の中から選ばれたも

のが2巻の Proceedings になって発刊されることになっている。われわれのパネルはオーガナイザーによって編集され、*Journal of Pragmatics* の特集号として刊行されることになった。

語用論とはことばの情報伝達上の機能と言葉の使用の場面を直視し、人間の普遍的なコミュニケーションを可能にする原理を探求するものである。国際語用論学会は、もっとも学際的な意味で、言葉とコミュニケーションを認知的、社会的、および文化的視点から捉える学会として、1986年にベルギーのアントワープ大学で設立された。学会設立以前に開かれた第1回を含め、2年に1回開かれている。現在会員数は60カ国から、1,800名を超えている。

建国1,000年を迎えた Hungary は、西と東の接点として、東欧諸国の近代化の先鋒として、ミレニウム学会にふさわしいところであった。ゆったりと悠久の時を刻んできたドナウ川を挟んで、古さと新しさが交錯する Budapest の街で、古代ローマ人になったような錯覚さえ覚えながら、議論を戦わす不思議な充実感を味わった。

2000年度言語研究センター主催 講演会についての報告

西野清治

今年度は、下記の二人の先生に講演をしていただくことができました。無理を言ってお願いしたにもかかわらず、お二人の先生ともこころよくお引き受けくださいました。深く感謝いたします。また、講演会に参加してくださった皆様、大変ありがとうございました。以下に、講演内容を簡単に紹介させていただきます。

第一回目「サンスクリット、およびサンスクリットの文献」

湯田 豊（神奈川大学教授）

10月25日(水) 参加者約15名

湯田先生は、今年『ウパニシャッド— 翻訳および解説—』（大東出版社）を出版され、それにより第36回日本翻訳出版文化賞を受賞された。そこで、今回、先生のご研究の周辺で、何か言葉を中心にすえたお話をしていただけませんかということをお願いした。講演では、おもにサンスクリット語について、できるだけ易しく話していただいた。私自身、サンスクリット語を勉強したことがないので、ここで先生のお話を正確に報告することはできない。ごくおおまかなまとめになってしまうが、先生は、まず、サンスクリット語の音韻とシンタクスについて解説された。そして、それと平行するような形で、百科事典の中に掲載されているサンスクリット語に関する記述について、批判等も交えながら解説された。「サンスクリッ

ト語がインドヨーロッパ語の祖語であるということや、「サンスクリット語は、ヴェーダ語の方言であり、文法家によって規範化され、洗練されてきたものである。」というようなことを指摘された。

私自身、サンスクリット語はギリシア語やラテン語の親戚のようなものであるという認識ももっていたので、サンスクリット語の表記もアルファベット形式でなされるものだと思いこんでいたところ、1つの文字が1つの音節を表すのだということを知り、日本語の「あいうえお」と同じではないかと思い、驚いた。後で先生に聞いたところによれば、日本語の50音はサンスクリット語の表記法を手本にして作られたということであった。

第二回目「意味研究への道」

国広 哲弥（神奈川大学名誉教授、東京大学名誉教授）

11月29日(水) 参加者約20名

国広先生は、自分がなぜ言葉の研究・意味の研

究の道に進むようになったのかということから始

めて（これは一部の所員から聞きたいという要望があったテーマである）、先生がたどりついた現象素という考え方を、具体的な例を交えながら、話された。

先生は旧制高校時代に、英語を週に9時間、中国語を3時間学んだという。そのときの英語の先生に教えられた英文解釈の仕方や、中国語の先生が実践していた、返り点を使わない独自の読み方などに強い刺激を受けたという。また、東大時代には、恩師にあられる服部先生の意味論に強い興味を覚えたという。国広先生は、当時全盛だった構造主義的な考え方をそのまま受け入れることなく、一見多義語に見えるような語の裏側に隠れている1つの核になるようなものを追求したいと考えた。そして、現象素（プロトタイプとはまた違うらしい）と先生が呼ぶものの存在を、独自に

提唱するに至った。これは、いま広く行われている認知意味論に通ずるものである。そして、現象素という考え方に基づいて、いろいろな分析を試みせてくれた：テンス・アスペクトに関しては、日本語の「る」や英語の現在形は「現在」という意味を持たない。それらは単に「未完了」しか表さず、テンスに関しては白紙のような状態であり、テンスが何であるのかを決めるのは他の要素である；「かける」という多義語の意味の分析は、ある対象物に何かを投げつけるというたった1つの現象素を想定し、その投げつけたものが対象物にどの程度到達しているかの度合いによって、いくつもの意味がその現象素から導きだせるというような具合にすることができ、等。その他にも、いろいろ興味ある分析を試みせてくれた。

パーフェクトテレビ設置

パーフェクトテレビの放送を録画編集したものを教室で教材として使用したいとの希望を受け、言語研究センターでは平成十二年度新規事業として三学科の各共同研究室に受信設備を置くことができた。パーフェクトテレビ設置の趣旨はあくまでも無尽蔵の生きた教材として放送を利用することにある。したがって英語はBBC、スペイン語はTVEを中国語は大富を各共同研究室で受信し、センターでもし同時時間帯に録画の必要がある場合の補助処置としてCNNとIPC（中南米放送）の二局を受信している。例えばスペイン語学科でTVEを英語学科でBBC録画時間中にIPCやCNNの録画も必要となった場合に

センターを利用して貰いたい。

予算の都合で各学科とも平成十三年四月からの受信契約となる予定だがセンターでは一足先にすでに上記二局は受信できる体制にある。事実、中南米放送のIPCはすでにセンターで毎日終日録画を行い、それを学生が視聴覚室で見ることが出来るよう配慮しているが利用学生の数は増える一方である。

受信契約費用の予算獲得に困難が予想されるのは承知だが、せつかくの設備であるから各学科共に有効かつ最善の利用をしていただければセンターとしては幸いである。

（所長）